

「日々の理科」(第1773号) 2019,-5,17

「クスノキの花(2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

常緑広葉樹のクスノキは、今の時期に3つの仕事を同時にして、姿を大きく変化させる。一つは新しい葉をつけること、ほぼ同時に昨年からの古い葉を落とすこと、そしてたくさんの花を咲かせることだ。



小石川植物園のクスノキも、美しい薄緑色(リーフグリーン)に染まり、その新しい葉に埋もれるように、白い花を咲かせている。1個体の樹木が大きいだけに、花の数も膨大で、その開花のエネルギーを得るためには、光合成能力の高い、若くて新鮮な葉が大量に必要なのだろう。



クスノキの花は非常に控えめなので、小石川植物園のように、手の届く高さに枝がなければ、花が咲いていることにすら気づかないだろう。クスノキの花序(花のつきかたの規則)は、「総状花序」の複合型で、「複総状花序」または「円錐花序」と呼ばれる、ちょっと変わった花のつきかたをする。



クスノキの花に近寄ってみると、なかなか美しい。花柄も花弁も真っ白で、まるで造花のようだ。



つぼみは、蠟細工か、高級な和菓子のようにも見える。花弁は最初三裂で、その中に隠れた花弁が姿を現して六裂になるようだ。



完全に開いた花は、花弁の数こそ違え、まるでスイセンの花のように美しい。クスノキは樹全体に強い防虫効果があるが、花自体は虫媒花である。アブなどが送粉するらしいが、私はその一瞬を観察し損なった。